中高生の秘密基地

文京区青少年プラザb-lab館長
認定特定非営利活動法人カタリバ　今村　亮

「湯島に新しい計画があるんです」

成澤区長のお言葉で私たちが文京区湯島とめぐりあったのは、2年前の初夏のことでした。梅雨が明け、夏の強い光が雲間からこぼれ始めていた時期だったことを、今でもよく覚えています。

湯島に移る新しい教育センター内に、なにやら文京区初の中高生のための公共施設が誕生するらしい。学校とも塾とも違う居場所。地域とつながり、挑戦の機会の中で、中高生の健全育成を支えるためのステージ。ふむふむ・・・？

歴史に疎い私でも、湯島が学問の地であるということは聞いたことがあります。そんな場所でどんな未来がはじまるのか、ただひたすらわくわくしたことが、昨日のことのように思い出されます。

このコラムは、b-lab開設の日々を振り返り、文京区のみなさまに御礼の気持ちをお伝えするために書かせていただいたご報告文のようなものです。貴重な機会をいただいたことを、心から感謝申し上げます。

そもそも自己紹介をしなければなりません。b-labの運営を受託している私たちは、認定NPO法人カタリバと申します。中高生のため新しい学びの機会をつくり、「生き抜く力」を引き出すため2001年に創業した認定NPO法人です。

「自分に人並みの能力はない」46・7％、「自分が参加しても社会は変わらない」68・3％。明日を担う高校生の現状は、このような〝自己肯定感〟の低さによって特徴づけられます。（「高校生の心と体の健康に関する調査　2011年3月」財団法人日本青少年研究所より）

ニートやフリーター、引きこもり、格差の拡大、機会の不均等・・・若者の仕事や教育をめぐる問題は、どうすれば解決できるでしょう？私たちが出した答えは、高校にキャリア学習の機会を届けることでした。

大学生のボランティアスタッフが中心となって高校を訪問。約2時間の授業で、高校生から「興味のある分野」や「進路についての悩み」の話を引き出し、スタッフは「大学生活で熱中していること」や「高校の頃の失敗談」を語りかけます。高校生が本音を話してくれる鍵は、親でも先生でもない（タテ）、友達でもない（ヨコ）、「ナナメの関係」。少し年上の先輩との出会いによる憧れや安心が、彼らの心に火を灯します。授業の最後には、高校生一人ひとりが「今日からできる小さな行動」を宣言。スタッフと約束を結びます。

こうしたプログラムを、学校の授業の中で実施することは簡単ではありませんでしたが、少しずつ時間をかけながら全国の中学校・高校に広がり、今では北海道から沖縄まで全国220校と連携しています。

また、東日本大震災をきっかけに、津波で大変な被害にあった岩手県大槌町・宮城県女川町に、放課後の居場所を施設運営するようになりました。ずっと東京を中心に活動してきたカタリバですが、被災地の力になれるよう、組織をふたつに分割することを決めました。代表が先陣を切って東北に移住し、私も何度も東北に出向きました。よそ者の私たちでしたが、歓迎してくださる仲間は少しずつ増えました。何もかもが流されてしまった瓦礫の町において、もはや教育を学校だけにお任せしている場合ではなく、みんなで関わろうという機運が高まっていたのだと思います。

あれから4年。復興の日々の中、毎日の放課後、私たちは地域の大人とともに子どもたちを支えています。決して十分とは言えない環境の中で子どもたちが力強く立ち上がっていく様子を何度も目の当たりにし、地域が教育を支える価値を深く確信することとなりました。学ぶこと、語ること、遊ぶこと、ときに涙を流すこと。すべてが子どもたちの未来へとつながっていきます。子どもたちの笑顔は、町にとってたしかな希望です。

ですので、私たちにとってb-labの運営にチャレンジすることは、被災地で見つかった可能性を社会全体にシェアすることを意味します。被災地から未来へ。それは、私たちがめざす復興の形でもあります。

というわけでさっそく私たちは工事現場を見学に行きました。湯島天神と東京大学に守られた閑静な住宅街へ足を踏み入れると、大きなクレーンや工事車両が見えてきて、たしかにそこには「文京区青少年プラザ」と書かれた案内板がありました。

ここがどんな場所になったら、文京区の子どもたちの未来につながるのだろう？そもそもこれから待ち受けている社会の未来は、どこへ向かうのだろう？私たちは夜中まで熱っぽく議論を重ね、提案書をまとめました。

のちにキーワードとしてまとまっていくのですが、私たちが提案したコンセプトは「中高生の秘密基地」でした。なんでも挑戦できる施設であると同時に、一方で、何もしなくてもいい施設であること。相反するふたつの在り方を包摂するには、「秘密基地」という言葉がぴったりでした。

この想いを受け入れてくださった文京区のみなさまに、私たちは運営を託していただきました。私たちのような若いNPOに施設を任せることの背景には、たくさんの心配があったはずです。その心配を一緒に引き受けていこうとする文京区児童青少年課のみなさまの心意気には、いつも勇気を頂いています。この結果をいちばん喜んでくれたのは、もちろん、今なお復興の日々がつづく東北の仲間たちでした。

ちなみにこの頃、b-labという名前はまだありません。実はこのアイディアを提案したのは、文京区の高校生でした。b-labは「Bunkyo laboratory」が元になる愛称です。実験場所・研究室を意味する「laboratory＝lab」に、文京区の「b」を乗っけたというわけです。発達過程の青少年期だからこそ、小さなチャレンジを恐れずに、小さな成功・小さな失敗を重ねる実験精神を大事にしたい、という想いがこめられています。なにより「ビーラボ」という語感は「青少年プラザ」より遊び心に満ちていて、おもしろいかもしれない。ここでもまた、文京区のみなさまは、自由なアイディアを認めてくださいました。

秘密基地というものは、やはり、つくるプロセスが一番おもしろいのです。私たちはb-labをつくる過程に参画したい中高生ボランティアを、大々的に募集しました。すると文京区内外から次から次へとたくさんの中高生が集まりました。その人数は、現在まで100人を超えます。

中高生スタッフたちとともに企画し、実現したものは数知れません。学校に届けるフリーペーパー、魅力を伝えるCM映像、b-labの内装デザイン、b-labのロゴ、b-labの音楽・ダンスイベント、九地区合同子どもまつりでのブース出展。自分たちがb-labをつくっているんだ、という責任感・主体性は、少しずつ中高生を成長させていきました。

一方で、新施設を運営するための職員採用活動も重要でした。新築の施設はもちろんb-labの重要な財産ですが、それ以上に重要なのは、はたらく人が魅力的であることです。まず、震災後に岩手県大槌町へ出向き拠点開設を経験した職員が、副館長として文京区に戻ってきてくれました。そして組織外からも、市役所から、高校教諭から、テレビ局から、大企業から、そして地元湯島から、b-labへの転職を決意するメンバーが集まりました。公共の秘密基地、というユニークな仕事を勤め上げる最高の組織が誕生しました。

そしてようやく2015年4月1日、b-labはオープンの日を迎えました。春休みということもあり、初日から行列ができました。感慨にひたっている暇もなく、あわだしくも愛おしい日々が、b-labではじまっています。

5月20日現在、登録者数918人、のべ来館数2,304人。加えて、ゴールデンウィークに実施したオープニングフェスティバルには、485名の方々に来館いただきました。今の課題は盛り上がっているb-labの勢いを止めないよう、悲しい事故やトラブルが起きないように運営の土台を固めることです。中高生スタッフががんばったのだから、ここからがんばるのは私達職員です。

まだb-labははじまったばかりです。中高生の自由な取組で、どんな未来がつくられていくのでしょう？今から楽しみです。